

18) オリーブ

オリーブはモクセイ科の常緑高木で、地中海沿岸地方及び小アジアを原産とし、高さ 10m に達する。初夏、強い芳香のある小さな黄白色の 4 弁花を無数につけ、果実は 2~4cm の長楕円形で、熟するにしたがって緑色から黄色、そして完熟すると紫から黒色に変わってゆく。完熟果には 20%の油分を含んでおり、この油分を取るために、ヨーロッパを中心として世界のあちこちで栽培されている。葉の表は白味を帯びた明るいグリーンで、葉の裏面は細毛が密植して白く見える。和名の由来はイギリス名の『olive tree』によるもので、学名は『*Olea europaea*』、属名は「油質の」という意味である。紀元前 3000 年頃にはすでにシリア地方で栽培が始められ、その他の地方でもほぼ同じ頃にエーゲ海の周辺で、オリーブ栽培が手がけられていたものと思われる。エルサレムには直径が 2.5m におよぶ大木があり、推定樹齢は 1000 年に及ぶといわれている。特に古代ギリシャ、ローマ時代には生活全体の必需品で、食用油はもとより、医薬品、化粧品、灯油など、ありとあらゆる油成分の需要を一手に引き受けていた。オリーブ油にはリノール酸やステアリン酸の他、パルミチン酸、オレイン酸を多く含んでおり、完熟果を乾燥させてから冷圧法によって搾油する。地中海沿岸地方が早くから文明の夜明けを迎えることができたのは、このオリーブの恩恵によるものと見ることもできる。4 大文明の発祥地が大河の恩恵に浴していたのに対して、この地方に大河はなく、それに替わるものは地中海である。そして麦でも米でもトウモロコシでもないオリーブが、この地には存在した。大河の氾濫が土地の再測量やさまざまな土木技術の発達を促した反面、オリーブ畑では農閑期に、石材を切り出して平坦地を作り、切り出した石灰岩や大理石で、さまざまな建造物や彫像を造り出す技術が磨かれていった。もしオリーブがなかったら、エーゲ海の文明は他の地方とは比較にならないほど遅れていたであろう。それほどオリーブはこの地方に恵をもたらしたのである。このように考えて見ると、文明は大河の流域に始まったという説は必要十分条件を満たしていない。4 大河の流域に文明が始まったのは確かだが、それを大河で特徴付けるのではなく、『自然の恵み』によって文明が始まったと見るべきだろう。とするとこれは 4 大文明ではない。5 大文明なのである。でないに地中海世界の先進性を語ることはできない。これは過去の歴史家の見落としではなからうか。

特に 1991 年 9 月にイタリアとオーストリアの国境付近のアルプス山中で、およそ 5300 年前にミイラとなって、今日まで凍土の中で保存され続けてきた『アイスマン』が発見されるに及んで、この地方にも高度な文化を持つ人類が生活していたことが確認された。彼が携帯していた銅製の斧は、高度な精錬技術を知ることが出来るほどに、純度の高いものであった。足の甲や背中にはいくつもの刺青が施されていたが、この刺青は、東南アジアから太平洋のそれとは異なり、ツボ治療の痕であったことも判明されてきた。というのも彼は『腰椎すべり症』を患っており、入れ墨

の位置から判断すると、その治療痕であったことが解明されたからである。中国でのツボ治療が完成されるにいたったのは、前漢時代に編纂されたとされる『黄帝内経』(コウテイダイケイ)と考えられるところから、その約 5,000 年前に、すでにこのアルプス地方では、高度な医学的治療が行われていたことになる。そればかりではない。胃の中から発見された食物の多くは、アルプス周辺に生息するウシ科ヤギ属の大型獣アイベックスや小型のウサギなど、動物の脂身の肉類であった。そしてさらに、小麦に水をかけて加工したパンの類のようなもの、ハーブなどの野菜類も検出されたのである。パンがオリエントで加工されるようになったのは 10,000 年から 8,000 年前頃と考えられるところから、この点でも必ずしも 4 大文明から、著しくおくらせているとも思えない。またアイスマンの腸内には寄生虫である鞭虫が発生していたが、これを克服するために、樹皮に生えるキノコを利用していた。というのは彼はその治療薬であるキノコのカンバダケを靴紐につけていたのであった。従って彼は寄生虫に対する治療法をも身につけていたわけである。さらにアイスマンは毛皮のコートを着用していたが、このコートは黒っぽい毛皮と茶色っぽい毛皮を交互に縫い合わせて、きちっとデザインされたものであった。さらに靴はクマの皮を靴底に用い、その中には防寒のためにワラを詰めていた。また脚には革のゲートルを巻き、衣服としては草を編んだ作ったシャツを着ていたのである。そして頭には熊の毛皮で作った顎ヒモ付きのフードをかぶっており、腰にはベルトを着用していた。しかもこのベルトには小さい袋が付けてあり、その中には火打石やナイフ状のもの、さらには乾燥したキノコが入れられていたのである。参考までに日本では縄文時代初期にあたる。

ところで彼の死因はもっぱら凍死説が有力であったが、2001 年の X 線撮影で、左の肩から鏃が見つかり、その後、脳に大きな損傷があり内出血していることや、動脈損傷による失血などが確認され、他殺されたものと認定されるようになった。戦によるものか、個人的な争いや怨恨によるものかは別にして、すでに万人が平等ではない社会構造が生まれ、おそらく貧富の差も発生していたことが推測される。こうしてアイスマンを解凍し、詳細を知って分かってきたことは、地中海沿岸地方から、アルプスにかけて、広大な文明圏が存在していたのではないかと考えられる点である。そして筆者はこれを『地中海文化圏』と名づけたく思うのだが、いかがだろうか。

さてオリーブは植えてから 10~15 年経たないと収穫することはできない。このためオリーブ栽培はこの間の「金利」もしくは「地代」の累積が大変に大きな額になる。そこでオリーブ栽培には長い間に特別なルールが定められた。その一つは土地を賃借してオリーブを栽培する場合には、収穫期にいたるまでの間、相当に安い地代で借地権が確保され、場合によってはこの間の地代を免除するという優遇措置をとるものであった。そして一旦収穫が始まった後も、地主から土地の返還を求められることなく、オリーブ栽培に専念できるよう権利を保証する反面、栽培を途中で放棄することのない

ように義務を課するものであった。ヨーロッパの権利と義務の関係は、オリーブが育てたと言っても過言ではない。しかしこの非効率な制度は時代の流れと共に、土地所有者の移動を促すものとなった。というのもプトレマイオス朝のエジプトにおいては、すでに国土の私有地化が始まり、ローマ帝政期に平和な時代が続くと、シリア北部の石灰岩台地では、主にローマ在住の不在地主が次第に解体され、オリーブ生産者の村落共同体にとって替わるようになったのである。多くの不在地主は、戦乱の時代に武勇の恩賞として、大土地を取得したローマの將軍達で、この所有地が時とともにオリーブ園に変わって行ったのである。これは時代の流れとして当然のことであった。

オリーブ生産は収穫期になると労働力の集約が多分に必要とされる。しかし反面その時期が終わると、極端に労働力の過剰が深刻になるという課題もあった。このため農閑期に労働者たちは、他の仕事で食いつなぐことが多かった。この仕事は主に石灰岩を切り崩して平坦地を作り出す土木作業で、そこをさらにオリーブ畑にするものや、平坦地に教会や集会所やオリーブ油を搾るための工場を作るというものであった。こうした労働力と土木技術はやがてローマの壮大な建築物や、上下水道などの建設技術として後世に受け継がれていったのである。

『旧約聖書』の「創世記」によると、大洪水の時に『ノア方舟』から放たれた一羽のハトが、オリーブの葉をくわえて戻ってきたことから、洪水が引いたことを知ったという。方舟は長さ約 135m、幅は約 23m、高さは約 14m で、上から 50cm の所に天窗が一つあるだけのもので、中からは外が見えなかったために、鳩に外の様子をうかがわせたのである。神様はノアの一家に食料のほかに鳥獣などのツガイをこの舟中に入れることを命じていたが、この洪水は 150 日間(40 日という説もある)も続いたという。方舟が漂いながらたどり着いたのは、アルメニアの北方地方にある『アララトの山』で、ノアはここに来て初めて神様から肉食することを許され、彼はブドウ作りを始めたのである。旧約聖書ではノアはアダムから数えて 10 代目に当たる子孫ということになっており、3 人の子セム、ハム、ヤペテに恵まれ、それぞれの子孫がやがてセム族、ハム族など、エーゲ海地方の諸民族になったと伝えている。ノアの方舟を題材にした美術作品などには、オリーブの葉をくわえた鳩が見えたり、人物や動物などが描かれているのはこのためである。

一方ギリシャでは海神『ポセイドン』と女神『アテネ』がアッチカの土地を争って、互いに価値ある贈り物を競って相手を負かそうとした。ポセイドンは三つ叉の矛でアテナイの城塞の岩を打った。すると海水がほとばしったが、アテネは同じ岩にオリーブの木を植えた。しかしこの贈り物の方が価値があったので、アッチカの土地は以来、知恵と戦いの神アテネに捧げられたといわれている。このためにオリーブは力と勇気のシンボルとなり、古代ローマにおいてオリーブは『ミネルヴァ』(Minerva =ギリシャ神話ではアテネ) や『ユピテル』(Jupiter =ギリシャ神話ではゼウス =英語

ではジュピター)の木とされたのである。この二神はユピテルの妻である『ユノ』(Juno =ギリシャ神話ではヘラ)とともにローマのカピトリウムの丘に祀られている。ところでこのユノは女性の結婚に関わる女神で、6月を意味する『June』は彼女の月であり、6月の花嫁『June bride』という考え方も、ここから生まれたものである。そしてミネルヴァはギリシャ神話では、金のリンゴを争った一人で(01-05-06-1 リンゴの項参照)、技術と工芸を司る女神として職人などに崇拜され、知的活動や学業、医療などにも関与していた。かつてオリンピックの勝者にこの木の枝で作られた冠が与えられたが、その後オリーブから月桂樹に変わっていった。

こうしてオリーブを見てくると日本のツバキとよく似ている。どちらも神の宿る木であり、食用油をとる木であり、それぞれの民族の神話とも結びついている。地中海の沿岸地方では今でも、オリーブから油をとる農業が延々と続いている反面、椿の方が途絶えてしまったのは、日本では早い時期にもっと効率の良い油をとるための植物が栽培されるようになったからであろう。しかし地中海では気候風土とオリーブ栽培独特の土地制度が、他の作物への転換を拒否し続けた。いずれにしる役に立つ常緑樹というものは、洋の東西を問わず、人間にとっては特別なもの、つまり「神の恵」、言い換えれば『自然の恵み』であったことには変わらない。

日本にオリーブが伝わったのは江戸時代の末期の文久年間で、1861年頃のことであった。最初は横須賀で栽培されたがうまく行かず、瀬戸内海の小豆島で行なわれて以来、やっと軌道に乗るようになって現在に及んでいる。花の季節になると小豆島では、この花の香で島全体が香気に満ちあふれる。今ではオリーブは大事な観光資源にもなっている。果実は油成分をとるだけではなく、未熟の実は塩漬けや酢漬けにして、酒の肴や料理の付け合わせ、オードブルやカナッペ、サラダなどの調味料やスパイスの代わりとしても用いられている。サフランと同様、地中海料理には欠かせない風味ということもできよう。また最近のイタ飯ブームのおかげで、ますますオリーブの需要は広がっている。

オリーブの果実にはオリュロペインという苦み成分が含まれており、これを灰汁抜きしないと食料にはならない。通常は苛性ソーダの2~3%溶液に漬けて灰汁を抜き、水洗、塩水洗を繰り返す、塩の中に漬けて10日ほどおいて良く発酵させて食用にする。材は堅く独特の木目を持つことから、細工物の木箱や小物入れ、玩具、家具、台所用品などに、葉は平和のシンボルとして、さまざまな意匠に用いられている。

オリーブは通常挿し木か接ぎ木で殖やすが、実生によって殖やすこともできる。しかし育てる場所は水捌けの良い暖地でなければうまく行かない。そしてもう一つ地中海の植物であるから、アルカリ性の土壌でなければならない。東京の田町駅東側のエリアには、オリーブの並木道がある。あまり知られていないが、花の頃にはうっすらとこの花の芳香が漂う。



びっしりと花をつけたオリーブ(東京都港区田町、駅の東側にオリーブの並木がある)。



オリーブの若い果実(埼玉県川口市)。



オリーブの若い果実は塩漬けにして食べる。果実にはオリュロペインという苦味成分が含まれており、生のままだと渋くて食用にはならない(埼玉県川口市)。



オリーブの熟した果実、搾ってオリーブ油を採る(東京都港区田町)。



たくさんの果実をつけたオリーブの若い木(栽培品：埼玉県深谷市)。

[目次に戻る](#)